

氏名	吳 暉榮
学位の種類	博士（言語学）
学位記番号	博 甲 第 8902 号
学位授与年月日	平成 31年 3月 25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	韓国人日本語学習者の初対面接触場面における自己開示の研究

主査	筑波大学 教授	博士（人文科学）	一二三 朋子
副査	筑波大学 准教授	博士（文学）	金 仁和
副査	筑波大学 准教授	博士（言語学）	松崎 寛
副査	筑波大学 非常勤講師	博士（言語学）	石田 プリシラ・アン

## 論文の要旨

本論文は、韓国人日本語学習者による初対面接触場面での自己開示の特徴を、実際の会話データを基に多面的な視点から明らかにする研究である。初対面の相手への自己開示は、良好な人間関係構築にとって非常に重要であるが、開示する内容や相手の自己開示への反応の仕方によっては、誤解を与えたり印象を悪くしたりする危険も伴う。そうした危険を未然に防ぐためには、接触場面での自己開示の特徴を明らかにすることが不可欠である。自己開示については心理学的研究はあるものの、質問紙によるものが多く、実際の会話を反映しているとは言い難い。一方、接触場面でのコミュニケーションに関しては、コミュニケーション・ストラテジーの種類と機能、相互交渉の様相、摩擦の原因、話題選択の方法などの研究がなされてきたが、自己開示という視点から明らかにした研究は少ない。

上記のような背景を踏まえ、本論文では日本語母語話者の自己開示との比較を通して韓国人日本語学習者の自己開示の特徴を明らかにする。本論文で設定する研究課題は以下の4点である。

- 【課題1】自己開示の内容別出現量と、開示時において意識したことを明らかにする。
- 【課題2】自己開示が現れる状況と返報性を明らかにする。
- 【課題3】自己開示の受け手の発話について、内容別出現量と、受け手に抱いた印象を明らかにする。
- 【課題4】自己開示の話題導入と話題展開の特徴を明らかにする。

本論文の構成は以下の通りである。

- 第1章 研究の背景と目的
- 第2章 先行研究と本研究の位置づけ
- 第3章 本研究のデータと研究方法
- 第4章 自己開示の発話量の比較と表現の特徴

## 第5章 自発的自己開示と相手からの質問による自己開示

## 第6章 自己開示後の受け手の発話

## 第7章 話題展開に見られる自己開示

## 第8章 本研究のまとめと今後の課題

第1章では、本論文の研究の背景と、自己開示研究における問題点に言及し、本論文の目的が述べられる。

第2章では、先行研究の紹介のあと、自己開示の定義が行われ、本論文の位置づけについて論じられる。

第3章では、データの収集方法と文字化の方法が示される。また、本論文の分析項目である「自己開示」の判定基準が提示される。

第4章では、【課題1】として、まず、韓国人日本語学習者と日本語母語話者の自己開示の全体的な出現量を比較する。次に、出現した自己開示の発話内容を客観的内容（事実、経験など）と主観的内容（感情、評価など）の2つに分け出現量を比較する。その結果、韓国人日本語学習者は日本語母語話者に比べ、自己開示の全体的な出現量が多く、主観的内容についても多く開示がなされることが示される。さらに、自己開示の表現の特徴を質的に分析した結果、韓国人日本語学習者は感情や考えを具体的・直接的に述べることが示される。

また、記述式質問紙調査から、韓国人日本語学習者は接触場面では特に私的領域に立ち入らないように意識していたことが明らかにされる。

第5章では、【課題2】として、自己開示の開示状況を、自発的に開示したか相手からの質問によって開示したかの2つに分けて分析する。その結果、開示状況の全体的な傾向として、韓国人日本語学習者は日本語母語話者と同様に自発的な開示が質問による開示よりも有意に多いことが示される。また、主観的な自己開示に関しては、韓国人日本語学習者のほうが日本語母語話者よりも多く自発的に開示する傾向が示される。これらのことから、韓国人日本語学習者は自発的に主観的な自己開示を積極的に行うことで、相手との関係を深めようとする傾向があることが明らかにされる。

第6章では、【課題3】として、自己開示後の受け手の発話に注目する。受け手の発話を「情報受容（相槌詞、笑い、繰り返し）」「情報交換（情報要求、情報提供）」「情報共感（共視、意見、感想）」に分類し出現量を比較した結果、韓国人日本語学習者は日本語母語話者に比べて「情報交換」「情報共感」が有意に多いことが示される。また、記述式質問紙調査から、韓国人日本語学習者は、接触場面において相手（日本語母語話者）の発話には相槌などの受容的なものが多く、形式的な印象を受けていることが明らかにされる。

第7章では、【課題4】として、まず、話題導入について新しい話題導入と1つの話題から派生する話題とに分類し出現量を比較した結果、韓国人日本語学習者は日本語母語話者に比べて新しい話題を矢継ぎ早に導入することが示される。次に、話題導入後の話題展開について3つのパターン「自己開示一方型」「質問一方型」「自己開示双方型」を提示し、パターン別の出現量を比較した結果、韓国人日本語学習者は日本語母語話者に比べて「自己開示双方型」が有意に多く、「自己開示一方型」が有意に少ないことが示される。これらのことから、韓国人日本語学習者は、活発に新しい話題を導入し、双方で互いに自己開示を行うことで、相手との距離を積極的に縮めようとする自己開示の様相が明らかにされる。

第8章では、各章から得られた知見が総括としてまとめられる。また、異文化間コミュニケーション研究という観点から本論文の意義が論じられ、日本語教育への示唆と今後の課題について論じられる。

## 審査の要旨

### 1 批評

本論文は、韓国人日本語学習者の自己開示の実態を明らかにしようとする研究である。従来の自己開示研究は、開示相手及び話題の違いによってどの程度自己開示するかを質問紙で調査するものが主流であった。質問紙調査が実際の自己開示の様相から乖離する限界を打開するために、本論文では初対面場面で韓国人日本語学習者及び日本語母語話者に実際に自己開示を行わせている。そこで収集された録音データを基に、自己開示の内容、開示状況、自己開示に対する受け手の反応、自己開示の導入及びその後の展開と、多面的な視点を取り入れて出現量を数値化し、接触場面と母語場面との比較、韓国語母語話者と日本語母語話者との比較を通して、韓国人日本語学習者の自己開示の特徴を客観的に検証することに成功したといえる。さらに、自己開示後の記述式質問紙により、開示者が開示相手に抱いた感想や開示中の意識を調査し考察に取り入れることで、数値のみでは明らかに出来ない開示者の内面を明らかにすることを可能にしている。

そこから明らかになったのは、韓国人日本語学習者は日本語母語話者に比べて、①全体としての開示量が多く主観的内容が多い、②自発的に内面的な自己開示をする、③相手の自己開示への興味関心の表明を多くする、④相手との距離を積極的に縮め、相手との関係を深めようとする、ということであり、従来の自己開示研究とは異なる側面からの新しい知見を多くもたらすものである。また、これまで印象論で語られることの多かった日韓のコミュニケーションの違いを、実際の会話録音データの数値化と統計処理により実証している点も特筆に価しよう。

一方、多面的な視点からの分析を行った反面、それらの関係が十分に明確になっているとは言い難い。また、本論文で得られた知見の一般化のためには、日本語学習者ではない韓国人にも調査対象を広げた実証的研究を積み重ねる必要がある。

上記のような課題はあるものの、本論文は、新しい研究方法のあり方を提示した点で自己開示研究に大きく寄与するものである。また、自己開示のあり方が異文化コミュニケーションにおける誤解や摩擦の原因となる可能性を指摘したことは、円滑な関係構築のためのコミュニケーション指導に応用できるという点で、日本語教育に有用な示唆を与える研究として高く評価できる。

### 2 最終試験

平成 31 年 1 月 18 日、人文社会科学研究科学学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

### 3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。